

2010（平成22）年度 在宅医療助成公募（後期）

「看取りを伴う在宅医療の地域ネットワーク作り」

実施報告書

申請者

折口内科医院 院長 高橋浩一

所在地

730-0822 広島市中区吉島東1-4-16

提出年月日

平成24年2月29日

1：問題点に気づくきっかけ

当方は在宅緩和ケア医として在宅医療を担当しているが、在宅医療をおこなっていく上で、いくつかの困難が存在している。少し前までは在宅医療そのものへの周囲の理解が乏しく、相談する相手（在宅医）も少ない状況であったが、最近になり在宅医療の勉強会などを通じての啓発およびネットワーク作りがすすんできている。在宅緩和ケアについても、「病院 vs 在宅」、という捉え方の中での連携は少しずつ整備されてきている。在宅看取りを希望される場合には、多くの場合その希望をかなえてあげられる状況になりつつある。

そういう背景のなか、当方は縁あって、2010年4月から、ある特別養護老人ホームの配置医師（嘱託医・非常勤医師）を引き受けることとなった。いわゆる施設医療の世界である。ところが、そこでも在宅医療をめぐる問題とまったく同じ問題がみられることに気がついたのである。

2：病院・在宅と施設の関係

認知症や脳血管障害後遺症など、自宅での生活が困難となり施設に入所せざるをえない人も多いことは周知のとおりである。人気のある施設では申し込んでも数年待ちという状況になっている。入所した本人や家族にとっては、そこはようやく手に入れた「終の棲家（ついのすみか）」である。最期までそこで暮らす場所、いわば第2の家、第2の自宅という認識である。

入所中の急変時には病院に搬送し入院治療がおこなわれるのは、これは当然である。しかし、入所者の中には癌患者もおり、認知症末期患者もいる。じょじょに衰弱し緩和ケアを受けつつ最期の時をむかえることになるのだが、その時点で「当施設では看取りをおこなっていない」という理由で病院に送り込まれるケースも多い。

患者も家族も第2の家、つまり在宅と同じと思っているのに、在宅緩和ケア・在宅看取りといった在宅医療に相当する医療を受けられない人たちが大勢そこにはいたのである。

これは施設側だけに問題があるのではない。医療者側の認識に問題があると考えられる。2011年の第16回日本緩和医療学会を例にとってみよう。大会テーマは「いのちをささえ いのちをつなぐ緩和ケア ～病院から地域へ～」となっているが、大会長あいさつ文のなかに、病院、在宅・自宅という言葉は出てくるが、老人ホームなど施設という言葉は全く出てこない*1)。 1300もの演題のなかに、老人ホームという発表はわずかに1題のみである*2)。 コミュニティケアに関連する演題のなかでも、「施設」という言葉が出てくるのはわずかに1題しかない*3)。 現時点において、緩和医療に関わるほとんどの医療者の頭の中には、施設というものが存在していないのである。病院から地域へ、と言いつつも病院と自宅しか頭になく、施設のことは頭にない。しかし緩和ケア・看取りを希望される患者は施設に確かに存在している。これが施設における緩和ケアの現状である。

3：地域ネットワークの必要性

在宅医療の分野では、他の在宅医に相談することも可能となっているし、ネットワークも各地で稼働しつつある。しかし、施設に関しては、誰が施設の配置医師・嘱託医師をやっているのか、という情報すらない状況である。つまり、相談先すらわからない、という状況にあった。行政には施設一覧表などはあるが、施設医師の氏名等は記載されておらず、行政側としても医師については全く把握していないとのことであった。

施設においても在宅緩和ケア・在宅看取りと同じように対応すればよいわけだが、他の誰が施設医かわからないという孤立した状況であるため、相談することもできない。まずは医師間のネットワークを作っていくことが最優先と考えられた。

4：ネットワーク作りのための母体の設立

地域ネットワーク設立という目標のために、まずは施設医師（嘱託医）を引き受けている顔見知りにも声をかけ、コアメンバーとして有志4名にて、勉強会として立ち上げをおこなった。2011年4月設立、広島施設医療勉強会である。設立の広報も兼ねた第1回の勉強会は6月5日に実施した。市民公開講演会、講師は世田谷区立特別養護老人ホーム 蘆花ホーム 石飛幸三先生、タイトルは「平穏死について考える」。会場は広島市民交流プラザ、来場者は80名であった。

引き続き年度内に3回の勉強会を開催した。

第2回 2011年8月11日 介護施設における保険請求のコツ（医師限定）

講師：医療法人好縁会 下山記念クリニック 下山直登 先生

会場：広島市中区 吉島公民館

参加者：7名

第3回 2011年11月27日 地域包括ケア時代の在宅および施設での看取り（市民公開講演会）

講師：兵庫県尼崎市 長尾クリニック 長尾和宏 先生

会場：広島市中区 中央公民館ホール

参加者：80名

第4回 2012年1月19日 施設看取りの実際（施設関係者限定）

講師：悠悠タウン江波 訪問看護ステーション管理者 谷口佳子 先生

会場：悠悠タウン江波会議室

参加者：20名

とくに第4回勉強会では、施設に勤務する看護師についても相談先がなく、事例検討や意見交換の場が必要であることがわかった。今後の発展的な活動の方向性、多職種へのネットワークの広がりが求められたものと考えている。

5：行政や既存団体とのネットワーク

行政や既存団体との協働、ネットワークも重要な課題と認識している。平成 23 年 3 月に広島市介護保険課・高齢福祉課に団体設立の趣旨説明に行き、賛同を得て、広島市の把握している施設一覧（81 施設）をいただいた。それをもとにアンケート、講演会案内・勉強会案内を郵送した。

社団法人 広島市老人福祉施設連盟にも趣旨に賛同いただき、講演会・勉強会開催情報を会員施設に FAX で流していただいた。

6：問題意識とネットワーク参加の意思

施設での看取りをおこなう上での問題点の抽出およびネットワークへの参加意思につき、アンケートを実施した。施設で看取りまでおこなっているかどうか、今後おこなう意思があるかどうか、等のアンケートを上記 81 施設の施設長および配置医師それぞれを対象として 5 月におこなった。

回収率は非常に悪かった。施設長からは 22、医師からは 12 の回答しか得られず、統計処理する意義はないため、今回の報告書では分析結果は割愛する。

得られた少数の回答のなかで、施設間格差が非常に大きいことは確認できた。すでに年間 10 名を越える看取りをおこなっている施設もあるし、看取りは全くゼロで、しかも今後も施設での看取りに対応する予定はないという施設・医師もあった。公にされている情報として、「看取り加算」を算定している施設かどうかということは公表されている。それによると 81 施設のうち 60%の施設が看取り加算を申請している。積極的に取り組んでいる施設とそうでない施設では、看取りの状況は全く異なることが確認できた。

また、同一法人内で複数医師が所属している施設では、当然すでに法人内ネットワークが成立しており、出張不在時などの相互協力システムが出来あがっている。このため今後新たにネットワークに加入する必要性も意思もないことが明らかとなった。施設医師間のネットワークを形成していくとしたならば、一人医師の開業医が嘱託医を務めている施設のみがネットワークの対象となることが判明した、というのがアンケートの結果の解釈である。まずはコアメンバーのネットワークを維持しながら新規参加希望者を受け入れる、という形にならざるをえないと考える。

7：職員教育および市民啓発活動

すでに看取りをおこなっている施設もあるが、その数はまだ少ない。職員に対する看取り教育をおこなっていかなければ、施設の看取りがすすんでいくことはない。そのため施設にて職員対象の緩和ケア教育、看取り教育が重要な意味をもつ。広島市内の施設担当者が集まる勉強会で講師として話をする機会を与えられたので、そこで出前講座を希望される施設をつのることにした。職員対象の出前講座をおこなう、ということは当事業助成申請書に記載してある内容である。いくつかの施設が出前講座を希望された。日程的に折

り合わず実施に至らなかった施設もあることは残念であった。

また、第1回広島施設医療勉強会（石飛幸三先生の公開講演会）にはマスコミも取材に訪れ、それをきっかけに在宅医療についての当院の取組や、胃ろうの問題がテレビの特集番組で取り上げられた。また一般向け講演会講師を依頼されるなど、一般市民向けのお話をする機会も増えた。施設での看取りがすすんでいくためには、家族側の理解も当然必要となってくる。啓発活動の機会を与えられたことは非常にありがたいことであり、今後も継続して啓発を続けていく必要がある。

以下に本助成金活動に関連する講演一覧を示す。

2012年2月26日 高齢者介護 市民公開講座&シンポジウム

住み慣れた地域でいつまでも心はずんで暮らしたい。

会場：近畿大学工学部広島キャンパス多目的ホール

第2部 シンポジウム テーマ：人生の最期まで心はずんで生きるためには
シンポジスト

- 1：西條節子 NPO 法人 COCO 湘南代表
地域での高齢者のくらしの経験から
- 2：高橋浩一 折口内科医院院長
在宅訪問の医師の経験から
- 3：本永史郎 社会福祉法人本永福祉会理事長
在宅支援の経験から
- 4：渡邊壽江 しゃくなげファーム施設長
小規模多機能型居宅介護での実態から

2012年1月12日 在宅緩和ケアと在宅での看取り

会場：グランラセーレ広島

広島市西区民生委員児童委員合同研修会

2011年12月8日 看取り介護について

あと会 職員研修会

2011年10月23日 看取り介護について

会場：ホテルセンチュリー21

社会福祉法人慈楽福祉会 管理職研修会グループ2

2011年10月22日 看取り介護について

会場：ホテルセンチュリー21

社会福祉法人慈楽福祉会 管理職研修会グループ1

2011年9月29日 がんについてよく知ろう！ ～予防・治療・緩和ケア～

会場：広島市西区 庚午北集会所

主催：広島市西保健センター・庚午北女性会・庚午北公衆衛生推進協議会

2011年9月1日 施設看取り介護について

会場：広島市中区 広島県健康福祉センター
広島市老人福祉施設連盟 中堅職員研修会

テレビ出演

2011年7月6日(水) RCC テレビ イブニングフォー。

特集：平穏死～終末期に口から食べられなくなったらどうする？～

8：結語

アンケート調査、講演会・勉強会、職員教育・啓発活動などを通じて、以下のことが判明した。

1：施設においても、看取りや緩和ケアを必要とする対象者は存在している。在宅看取り、在宅緩和ケアとまったく同じ問題点が施設医療にも存在している。

2：施設医療においては、看取りについての取組の施設間の温度差が非常に大きい。すでに毎年数十人看取っている施設から、今後も全く取り組む意思のない施設まである。

3：ネットワーク形成の必要性や意義を認める医師がいる反面、大規模施設や同一法人内でシステムが構築されており新たなネットワークの必要性も意義も感じていない医師も多い。ネットワーク参加についての温度差も大きい。

4：施設に勤務する看護師等も事例検討会や相談できるネットワークを必要と感じている。

5：施設においては、職員の看取り教育が重要な課題である。教科書的なものではなく、各施設が独自に手さぐりで実施している状況にある。

6：市民やマスコミも、在宅や施設における看取りや緩和ケアに関心が高い。

これらの課題に対応していくために、今後は多職種参加の事例検討会などを勉強会として実施していく。また施設看取り・施設緩和ケアの基本部分のマニュアルのようなものが整備できればよいと考えている。このように勉強会を続けていきながら、参加希望者をネットワークに引き付けていく、という方向になると考える。

9：参考文献

* 1) 大会長メッセージ 十和田市立中央病院院長 蘆野吉和。第 16 回日本緩和医療学会学術大会 プログラム・抄録集 (2011 札幌)

* 2) 特別養護老人ホームにおける緩和ケアの実践 国立長寿医療研究センター 西川満則。第 16 回日本緩和医療学会学術大会 プログラム・抄録集 (2011 札幌)

* 3) ホスピスケアを地域の中で ケアタウン小平クリニック 山崎章郎。第 16 回日本緩和医療学会学術大会 プログラム・抄録集 (2011 札幌)

写真1 平成23年6月5日第1回広島施設医療勉強会

コアメンバー 左から折口内科医院 高橋浩一（代表）、城谷内科医院 城谷良文、講師の石飛幸三先生、小川内科医院 小川潤一郎、斉藤内科医院 斉藤敏史



写真2 平成23年11月27日第3回広島施設医療勉強会

講師：兵庫県尼崎市 長尾クリニック 長尾和宏 先生



本研究は、公益財団法人 在宅医療助成 勇美記念財団 2010（平成22）年度 在宅医療助成公募（後期） 「看取りを伴う在宅医療の地域ネットワーク作り」の助成による。